社会貢献型の番組「ワンステップ」でボランティア

西田　尊義さん（経営3）

鳥取県出身の西田尊義さん（経営3）にはこの夏、第2の故郷ともいえる場所ができた。TBSの「ワンステップ」（＊注）に出演。過疎化による人手不足で、約820年続く祭りの存続が危ぶまれていた五島列島北端の宇久島（長崎県佐世保市）

長崎・宇久島で「八阪神社　祇園祭」を盛り上げる

子供たちに思い出づくり　得意のサッカー生かす

で「八阪神社祇園祭」（7月12、13日）を盛り上げた。

当初、青年会からの要望は「神輿（みこし）の担ぎ手と祭りの運営の補助」だったが、ほかのメンバー4人と話し合う中で「頼まれたことをやるだけでいいのか」という疑問がわきあがってきた。「今年は、担ぎ手が増えるが、それでも小学生の参加が増えた。『模試があるから参加できない』と言っていた高校生が、終わって駆けつけてくれたときは、心が通じたと感激しました」。

撮影の途中からは、番組を意識せず、一人の人間として、恩返ししたいという気持ちが強くなった。祭りが盛況に終わって駆けつけてくれたときは、心が通じたと感激しました」。

撮影の途中からは、番組を意識せず、一人の人間として、恩返ししたいという気持ちが強くなった。祭りが盛況に終わり、参加をうながす手作りのチラシを小学生に配った。得意なサッカーでコミュニケーションを図るなど地道な活動が功を奏し、例年よりも小学生の参加が増えた。「『模試があるから参加できない』と言っていた高校生が、終わり、「お前たちは仲間だ。いつでも島に帰って来い」と声をかけられ号泣したという。「番組を見てくれた人たちが過疎についての問題意識をもち、少しの勇気で一歩を踏み出すことが、誰かのためになると思ってもらえたらうれしいですね」。今も島の人々との交流は続く。

新井範子ゼミで「マーケティングをみる・消費者を探る」ことを学び、さまざまな世代の人と話すことや企画することが得意という西田さんは、フットサルの大会で社会貢献の意識調査に協力し、番組スタッフに声をかけたことから、貴重な一歩を踏み出した。今回の経験から番組制作に興味をもち、将来の方向として考え始めている。

＊TBS系列日曜23時30分～。「明日のために、誰かの笑顔のために」ボランティアをしたい人の最初のステップを応援し、日本各地のさまざまな事柄を解決しようとする社会貢献型番組。

▶ 祭りを一緒に盛り上げた皆さんと（前列中央が西田さん）

▲ 伝統ある神輿を担ぐ

バレーボール北京五輪・アジアユースのアナリスト

高橋　英介さん（経済3）

▲ 表彰式後、応援してくれた現地の日本人学校生徒たちと（左から2人目が高橋さん）

「ナショナルチームでの活動」入学時の目標果たす

「在学中にナショナルチームに携わる」という目標を入学時に抱いていた高橋英介さん（経済3）は、今夏の北京五輪に全日本男子バレーボールチームのアナリストとして、吉田清司法学部教授と共に参加した＝**8月号既報**。第7回アジアユース男子選手権（10／14～22、スリランカ・コロンボ）にもアナリストとして参加し、全日本男子ユースチームの5大会ぶり2度目となる準優勝に貢献した（この成績で2009年の世界ユース出場権獲得）。

中学からバレーボールを始め、太田東高（群馬県）では、部長を務めたが関東予選直前のけがで、高校時代は不完全燃焼に終わる。「悔しさから大学では、高いレベルでバレーボールに携わりたいと思い、独学でコーチ理論を学んでいたときに、吉田教授が解説した書籍に出合ったのです」。「どんな教授がいるかで、大学を選んでみては」と担任にアドバイスを受け、専大に進学した。

「スポーツ演習の授業にバレーボールシューズを履いて出席したとき、担当の先生から『バレーボールをやっていたの？』と声をかけられ、目標を話したところ、憧れの吉田教授を紹介してもらうことができました」。

吉田教授のネットワークで1年次の途中からVリーグの下部リーグにあたるチャレンジリーグ「FC東京」でアナリストとしての一歩を踏み出す。2年次から同教授の教養ゼミで「球技系スポーツにかかわる戦略」を学んでいる。「数多くの試合に参加させてもらうことで、経験を積むことができますが、収集したデータから、どのように資料をつくるかなどで、ゼミの学びが役立っています」と理論と実践の結びつきを話す。

「ユースの大会で、アナリストをつけたのは今大会が初めてだったので監督や選手も最初は戸惑っていたようですが、大会前の合宿から、高校生に理解しやすいように説明し、一方的に伝えるのではなく、質問しやすい雰囲気をつくるように心掛けました」と振り返った。

「北京五輪で日本バレー界トップの指導者や選手の皆さんと出会い、ふつうの学生生活では体験できないことをさせてもらい、視野が広がりました。これからはバレー以外にも目を向け、バランス感覚のある学生生活を過ごしたい」と話す。

入学時の目標を果たしたいま、大学院でスポーツ戦略を学びたい気持ちもあるが、メディアでスポーツを伝える仕事にも興味を持ち始めているという。

企業研修報告会　ネットワーク情報学部で

10月7日、生田キャンパスでネットワーク情報学部の08年度企業研修報告会が行われた。

小林隆教授からの概要説明のあと、綿貫理明教授から企業研修は「社会知性の開発」を実践する場であるとの説明があり、続いて、三浦裕佳さん、浅沢星子さん、竹林香さん、金子哲也さんの4人が苦労談を交えての業務体験報告を行った。

報告のあとに、研修受入れ先企業の山本純一氏（㈱コア）と杉本芳隆氏（小泉成器㈱）から学生たちへの励ましの言葉をいただいた。

これに先立つ9月26日には㈳神奈川県情報サービス産業協会でインターンシップ成果発表会があり、当学部からは高山久美子さんと西山洋平さんが体験を発表し高評価を得た。※発表学生の学年はいずれも3年次。

三浦さん　浅沢さん　竹林さん　金子さん

「平和・戦争展」で報告　大山莉加さん（文3）

大山さん

▲「平和・戦争展」で。川上ゼミの矢嶋仁ゼミ長（文3）

ゼミ活動で雑誌作りを行っている文学部・川上隆志ゼミ。ゼミ生の大山莉加さん（文3）は、取材で本学生田キャンパス近くの旧陸軍登戸研究所で戦時中に秘密兵器の開発が行われていた事実を知った。横浜市で10月に開催された第16回横浜・川崎「平和のための戦争展」で、同研究所の実態をパネルで報告した。

同研究所は、現在の明治大学生田キャンパスの敷地を中心に11万坪に広がっていた施設。現在、木造2棟と鉄筋1棟の建物などがキャンパス一角に残る。1937年に設置され、秘密戦、謀略戦のための兵器の研究・開発、にせ札作りなどが行われた。

大山さんは同研究所に足を運び、保存を求める市民団体や、かつて勤務していた男性ら関係者から話を聞いた。

「身近にある〝負の遺産〟を知り、戦争は遠い存在でない」と実感した大山さん。この模様を制作中の雑誌『SHOW』第3号で紹介する。

被害者にも、加害者にもならないために

セクシュアル・ハラスメント防止委員会から

皆さんは、セクシュアル・ハラスメントについて、どのくらいのことをご存じでしょうか？

「性的いやがらせ」と訳されるセクシュアル・ハラスメントは、一言でいえば〝行為を受けた人が不快と感じる性的な言動〟と定義されます。しかし、「どこからがセクハラなのかわからない」「マスコミに取り上げられる事件くらいは知っている」など、知っている範囲は人によってさまざまです。

セクハラをめぐるトラブルの中で、加害者は「そんなつもりはなかった」とよく言います。言葉を換えれば、「相手がそんなに傷ついているとは知らなかった」ということです。

セクハラの根本的な原因として、性に基づく役割分業や性のダブル・スタンダード（性規範の二重基準＝男性には性規範が許容的であり、女性には性規範が厳しいという性別の基準）がしばしばあげられます。こうしたジェンダーや性のダブル・スタンダードへの皆さんの理解についてはどうでしょうか？

非常に残念なことですが、今年7月、セクハラを理由とした解雇処分がありました。これは事業主として大学がセクハラを防止するために講じた措置ですが、加害者には大きな代償となりました。

罰することで悪い芽を排除することも時には必要なことです。とはいえ、相手の立場や気持ちを尊重し、多様性を受け入れることがより一層重要です。それは、セクハラという人権侵害のないキャンパスづくりへの第一歩です。セクシュアル・ハラスメントの被害者にも、そして加害者にもならないために…。

（佐藤公子）

「いんふるえんざ」

健康フラッシュ

今年も、もうすぐあの季節がやってきます。そうです、インフルエンザの流行です。その特徴は、型別（今年は新型が流行するという懸念もあり）が多い、感染力が強い、高熱が出る、などです。かぜの症状の強いものとも言えますが、他のウイルス感染症と違うのは、迅速診断法や治療薬があるということです。迅速診断は、喉や鼻に綿棒を入れ、ぬぐい液を採取し、反応をみるというものです。陽性とされた場合に治療をということになりますが、治療薬は発症から48時間以内に服用しなければ効果はありませんし、10代の男性には一時使用不可扱いになっていたのはご存じの方も多いでしょう。そうすることと予防が大事ということになりますが、一般的にいえばマスクをする、よく手洗いをする、人込みには近付かない、乾燥を避ける、などでしょう。

しかし、集団生活をする学生諸君や教職員の方々に現実的な予防法は、ワクチン接種しかありません。接種するにあたっては、薬剤アレルギーがありえること、卵で培養しているので卵アレルギーがある場合や妊婦は要注意ですが、非常に有効な予防法と考えられており、接種しない人たちに比べ発症が数倍も抑えられたという統計もあります。方法は、体調のいい時に近隣の医療機関に行けば簡単な問診のみでうってくれます。診断されたら、解熱後2日経つまでは登校停止ですので、それも守って感染の拡大をさせないように協力をしてください。

（代表校医・成田信義）